

留萌いま・むかし 第90話

留 萌 川 の 橋

福 士 広 志

海のふるさと館学芸係長

切り替え前の留萌川は、今の港の中を蛇行しながら流れていたことはみんな良く知っていることである。そして、町は大きく川の北側と南側に分断されていた。そこで、留萌の川には必然的に「橋」が必要であった。江戸時代の絵図をみると留萌川の河口の部分に橋が描

本州でも軍事上の理由から橋はあまりかけることをしなかつた。当時の蝦夷地においても珍しかったことだろう。

しかし、この橋も毎年融雪期の増水や、秋から冬に



かれています。安政年間にルモツペを通つた松浦武四郎の廻浦日記には  
イルヌヌモムヘツ  
川幅五十余間、則運上屋下也。舟板を以て橋とし：  
ーとある。

舟の古材をもって橋としていたことがわかる。当時

かけての留萌に押し寄せる波浪によって破損し、頻繁にかけ替えられたと考えられる。

明治になつてからは、明治八年十月に漁場持栖原小右衛門外九名が百三十五円

で板の柵をかけている。これは当時道路幅八間のメイトリートであった大町の南記念通りと川北(元町)の北記念通りを結ぶ橋である。後に記念橋と呼ばれる。この橋も何度となく破損

した。明治十六年四月二十二日春先の出水で破損し、橋の三分の一が落ちてしまった。また、明治二十年四月にもやはり春先の出水で破損し、人の馬の通行ができず難儀しているの

で修繕したいと北海道庁に上申している。この結果明治二十一年七月にかけ替えをしたが、翌明治二十二年四月二十日再度出水により大きな氷の塊が橋にぶつかり大きく破損し、再度修繕

の伺をたてている。このように留萌川にかけられた橋は破損を繰返し、その通行ができなくなつた。そのため、仮の渡し舟が人の馬の通行に一役かつたのである。明治から大正生まれの人はこの渡し舟を知っているに違いない。この記念橋の他に留萌川には明治二十九年に道路幅十間の十字街を通る南大通りから北大通り(川北)に通じる吊り橋が設けられた。しかし、この橋は登り口が一メートル二十センチ程高くなつており、人の通行には差し障りなかつたが、牛馬の通行には非常な不都合があつた。そのため、明治三十年にはこれをなんとかしてほしいと警察が留萌の戸長役場へ頼んでいる。今は国道二百三十一号線の留萌川架橋工事が進展している。新しい留萌の橋の歴史に一ページを残そうとして